

東京女子医科大学看護学会の未来に向けて

佐藤 紀子（東京女子医科大学看護学部）

私が東京女子医科大学という組織の一員になったのは、10数年前のことでした。そのときはあまり意識をしていませんでしたが、今の私にとって所属する看護学部の魅力は、女子医大病院があることに尽きると思っています。私にとって短大時代も含めて大勢の卒業生がいる女子医大病院は、共同研究をとおして私を育ててくれた貴重なフィールドでもあります。現在までのがん看護の分野、手術看護の分野で共同研究者として something new を生み出す仲間としておつきあいをさせていただいております。この研究のプロセスはいつも苦しいものです。仕事を終えてからの時間の中で苦労しながらやっておりますが、実践家のかたがたの持つ暗黙知を言葉にさせていただきながら、私はいつも新たな看護の知を学ばせていただいております。私としましては、このような研究の成果を公表する場としてこの学会を活用したいと考えております。また、看護学研究科で私が担当しているがん看護の修士の学生さんの研究発表の場、博士課程の看護職生涯発達学の学生さんたちの研鑽の場としても積極的に活用させていただきたいと思っております。そのためには学会が発表の場を越えて知を生み出す場となることを望んでおります。

看護学部、看護学研究科の教員として仕事をしている私にとって、女子医大看護学部の魅力は、私のそばに臨床の場があることです。このことが私をいつも現場へと誘い、その魅力・奥深さに巻き込まれ、何か困ったこと、分からないことがあると現場に出向き、臨床家のみなさまに臨床で起こっているさまざまな現象を教えてもらえることを通して研究・教育への示唆をいただいております。つまり、この学会の運営は、私たち看護者の日常的な研鑽に支えられています。実践家と研究者と、またそれぞれが連携を縦横にとりながら研鑽する場として女子医大看護学会に大いに期待しております。そして会員のひとりとして意義深い価値のある学会の創造に寄与していきたいと考えております。